

牛頸土地区画整理事業地内
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ

牛頸洞ノ元古墳

大野城市文化財調査報告書

第38集

1993

大野城市教育委員会

牛頸土地区画整理事業地内
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ

牛頸洞ノ元古墳

大野城市文化財調査報告書

第38集

1993

大野城市教育委員会



胴ノ元古墳調査後全景

序

本書は、牛頸土地区画整理事業にともなう埋蔵文化財発掘調査報告書の第4集です。これまでに刊行されたもののうち、第1・2集は窯跡調査、第3集は古墳調査の報告書ですが、今回は第3集に続いて古墳調査の報告書となります。胴ノ元古墳は、牛頸の胴ノ元地区の小高い丘の上にあり、地元ではその存在を広く知られていましたが、発掘調査の結果、ほぼ完全に石室が残っていることがわかりました。当初牛頸土地区画整理事業の計画では、胴ノ元古墳のあった丘を削って児童公園を作ることになっていました。しかし、このような調査結果をうけてこの古墳を保存・活用する方向で牛頸土地区画整理組合と協議を重ねた結果、胴ノ元古墳を本来の形に復元し、公園敷地内に移転した上で、公園自体を「古墳のある児童公園」として運営していくことに決定しました。牛頸地区、さらにはより広く北部九州の歴史を知るための生きた教材が、このように末長く保存・活用されていくことは、大変によろこばしいことです。

最後になりましたが、調査ならびに復元・移転費用の負担をはじめとして終始多大なご協力をいただいた牛頸土地区画整理組合、いろいろと便宜をはかっていただいた地元牛頸区の皆さん、種々のご協力をいただいた工事関係者の皆さん、また、ご指導・ご助言をいただいた関係者各位に、心より感謝申し上げます。

平成5年3月31日

大野城市教育委員会

教育長 久野英彦

例 言

1. 本書は、大野城市牛頸土地区画整理組合（理事長 戸渡朋來）より委託を受けて福岡県大野城市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査の記録である。
2. 遺物写真は、岡紀久夫の撮影による。
3. 遺物実測は秀嶋和子が、製図は同人と河鍋洋子とが担当した。
4. 出土遺物については、小破片であったり風化の著しいものは図示しなかった。
5. 本書の執筆・編集は徳本洋一が担当した。
6. 本書に掲載した地形図には、建設省国土地理院発行の2.5万分の1『福岡南部』・『不入道』を使用した。

本文目次

Ⅰ．はじめに	1
(1) 報告に際して	1
(2) 調査の経過	2
Ⅱ．位置と環境	6
Ⅲ．調査の結果	10
Ⅳ．まとめ	19

表目次

表 1．牛頸土地区画整理事業地内遺跡地名表	3
表 2．牛頸周辺遺跡地名表	7

図版目次

図版 1	(1) 胴ノ元古墳調査前遠景 (西から)
	(2) 胴ノ元古墳調査前遠景 (北から)
図版 2	(1) 胴ノ元古墳調査前全景
	(2) 胴ノ元古墳調査前近景
図版 3	(1) 胴ノ元古墳調査後遠景 (南東から)
	(2) 胴ノ元古墳調査後全景
図版 4	(1) 胴ノ元古墳調査後全景
	(2) 胴ノ元古墳石室 (正面から)
図版 5	(1) 胴ノ元古墳石室 (左袖)
	(2) 胴ノ元古墳石室 (右袖)
図版 6	(1) 胴ノ元古墳石室 (奥壁側を望む)
	(2) 胴ノ元古墳石室 (羨道側を望む)
図版 7	胴ノ元古墳出土装身具、鉄器
図版 8	胴ノ元古墳出土土器

挿 図 目 次

第1図	牛頸土地区画整理事業地内遺跡分布図（1/1万）	折り込み
第2図	牛頸周辺遺跡分布図（1/2.5万）	折り込み
第3図	位置図（1/1万）	折り込み
第4図	胴ノ元古墳地形実測図（1/200）	11
第5図	胴ノ元古墳石室実測図（1/60）	折り込み
第6図	胴ノ元古墳墳丘断面実測図（1/60）	13
第7図	胴ノ元古墳遺物出土状態実測図（1/30）	14
第8図	胴ノ元古墳出土装身具・鉄器実測図（1/1、1/2）	15
第9図	胴ノ元古墳出土土器実測図①（1/3）	16
第10図	胴ノ元古墳出土土器実測図②（1/6）	17

I. は じ め に

(1) 報告に際して

本書は、牛頸土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書の第4集である。これまで第1集で後田窯跡群、第2集で小田浦窯跡群、そして第3集では両窯跡群とそれぞれ同地域にあった後田・小田浦古墳群の報告を行ってきた。今回報告する胴ノ元古墳は、すでに早くから開口しており、地元では広くその存在を知られていたものである。

牛頸土地区画整理事業は、総面積101.2haに及ぶ大規模な事業で、昭和58年に組合が設立され、翌59年10月27日に起工式がとり行われた。この区画整理事業に伴う発掘調査は、昭和57(1982)年5月の月ノ浦窯跡群の調査に始まり、平成3年3月胴ノ元古墳の調査終了まで9年間を要した。現在事業は終盤を迎え、かつて山林であったところに道路が敷設され、住宅が建ち並んでいる状況である。

調査に際しては、事業主体者である牛頸土地区画整理組合、工事施工者の鎌田建設、大野城市区画整理課、地元牛頸区の皆様に多大なご協力を得た。また、関係各位からは多くの指導・助言を得た。ここに厚く感謝の意を表したい。

本市教育委員会歴代の調査体制は以下のとおりである。

教 育 長	二 宮 親 卯
	久 野 英 彦
教 育 部 長	後 藤 幹 生
	村 上 信 幸
	池 田 嘉 門
	助 村 浩 靖
社 会 教 育 課 長	井 原 信 一
	船 越 美 直
	岡 部 弥之助
	關 隆 昭
社会教育課長補佐・係長	赤 星 健 彦
	安 垣 巧 高
	青 木 克 正
	白 水 岩 人
庶務担当主査・主事	後 藤 秀 規

	高 橋 裕 司
	浦 山 敏 弘
調 査 担 当 技 師	舟 山 良 一
	向 直 也
	徳 本 洋 一
同	秀 嶋 和 子
嘱 託	横大路 俊 明
	下 村 精 一

(2) 調査の経過

各年度の調査経緯は以下のとおりである。

○昭和57年度(1982年度)の調査

- | | |
|-------------------------|---------|
| 1. 月ノ浦Ⅰ号窯跡(27地点) | 5～6月 |
| 2. 分布調査 | 10～11月 |
| 3. 後田古墳群(2～4号)(42・43地点) | 11～翌年2月 |

○昭和58年度(1983年度)の調査

- | | |
|--------------------|---------|
| 1. 小田浦窯跡群(31～34地点) | 11～翌年2月 |
|--------------------|---------|

○昭和59年度(1984年度)の調査

- | | |
|----------------------|---------|
| 1. 下ノ原遺跡(20・24・25地点) | 8月 |
| 2. 小田浦窯跡群(50・51地点) | 11～翌年2月 |

○昭和60年度(1985年度)の調査

- | | |
|-----------------------|---------|
| 1. 小田浦窯跡群(37・40・57地点) | 10～翌年2月 |
| 2. 後田窯跡群(59・60・63地点) | 2～3月 |

○昭和61年度(1986年度)の調査

- | | |
|----------------------------|-------|
| 1. 後田窯跡群(61・65・66・45・46地点) | 4～10月 |
| 2. 小田浦窯跡群(28地点) | 10月 |
| 3. 後田古墳群(44・42・43・53地点) | 10～2月 |
| 4. 小田浦古墳群(37地点) | 2～3月 |

○昭和62年度(1987年度)の調査

- | | |
|----------------|--------|
| 1. 塚原遺跡群(13地点) | 4～翌年3月 |
| 2. 畑ヶ坂遺跡(14地点) | 6月 |

○昭和63年度(1988年度)の調査

- | | |
|----------------|---------|
| 1. 塚原遺跡群(13地点) | 4～5月、8月 |
|----------------|---------|

- | | |
|------------------|----------|
| 2. 畑ヶ坂遺跡 (14地点) | 5～8月 |
| 3. 日ノ浦遺跡 (16地点) | 9～翌年2月 |
| 4. 日ノ浦Ⅱ遺跡 (22地点) | 11月、翌年3月 |
| 5. 塚原遺跡 (12地点) | 2月 |

○平成元年度 (1989年度) の調査

- | | |
|------------------|--------|
| 1. 塚原遺跡 (12地点) | 4月 |
| 2. 日ノ浦Ⅱ遺跡 (22地点) | 5～6月 |
| 3. 日ノ浦遺跡 (16地点) | 6～翌年3月 |

○平成2年度 (1990年度) の調査

- | | |
|-----------------|--------|
| 1. 塚原遺跡群 (13地点) | 7～12月 |
| 2. 胴ノ元古墳 (1地点) | 翌年1～3月 |

表1 牛頭土地区画整理事業地内遺跡地名表

No.	遺 跡 名	調 査 年 度	遺 跡 の 内 容	備 考
1	胴ノ元古墳	1990 (H. 2)	円墳1基 (横穴式石室) (古)	
2	胴ノ元窯跡群		須恵器窯跡1基以上、未確認 (古)	
3	胴ノ元遺跡		散布地、未確認 (縄)	
4	正楽寺遺跡	1990 (H. 2)	試掘調査で確認できず	
5		1988 (S. 63)	試掘調査で確認できず	
6		1988 (S. 63)	試掘調査で確認できず	
7		1988 (S. 63)	試掘調査で確認できず	
8		1988 (S. 63)	試掘調査で確認できず	
9	畑ヶ坂窯跡群		須恵器窯跡 窯体確認できず (奈)	
10	"		須恵器窯跡 窯体確認できず (奈)	
11		1988 (S. 63)	試掘調査で確認できず	
12	塚原遺跡	1988・89 (S. 63・H. 1)	集落跡 (平～鎌)	
13	塚原遺跡	1987・88 (S. 62・63)	集落跡 (住居跡26軒) 古墳 (24基) (古～奈)	
14	畑ヶ坂遺跡	1988 (S. 63)	集落跡 (住居跡4軒) (古～奈)	
15	畑ヶ坂窯跡群		須恵器窯跡 窯体確認できず (奈)	

No	遺 跡 名	調 査 年 度	遺 跡 の 内 容	備 考
16	日 ノ 浦 遺 跡	1988・89 (S.63・H.1)	集落跡 (住居跡22軒) (古～奈)	
17	畑 ャ 坂 遺 跡	1987 (S. 62)	集落跡	
18	畑 ャ 坂 窯 跡 群		須恵器窯跡確認できず	
19	日 ノ 浦 遺 跡			
20	下 ノ 原 遺 跡	1984 (S. 59)	試掘調査で確認できず	
21	日 ノ 浦 II 遺 跡	1986	試掘調査で確認できず	
22	"	1988・89 (S.63・H.1)	豊棺墓、土坑墓、古墳 (弥～古)	
23	"		流れ込みの土器多数出土 (平)	
24	下 ノ 原 遺 跡	1984 (S. 59)	試掘調査で確認できず	
25	"	"	試掘調査で確認できず	
26	月 ノ 浦 古 墳		円墳1基 (横穴式石室) 1979 (S. 54) 調査 (古)	『牛頸中通遺跡群II』所収
27	月 ノ 浦 窯 跡	1982 (S. 57)	窯体削平、灰原から須恵器、軒丸瓦、平瓦、鴟尾 (古)	
28	後 田 窯 跡	1986 (S. 61)	灰原のみ、須恵器、瓦	
29	柳 ャ 原 古 墳 群	1983 (S. 58)	確認できず、尾根の凸凹の見誤りと思われる	
30	後 田 窯 跡 群			
31		1983 (S. 58)	試掘調査で確認できず	
32		"	試掘調査で確認できず、弥生土器散布	『牛頸小田浦窯跡群』所収
33	小 田 浦 窯 跡 群	"	須恵器窯跡1 (古)	"
34	"	"	須恵器窯跡1、(窯体ほとんど流失) (古)	"
35	柳 ャ 原 古 墳 群	1983 (S. 58)	確認できず	
36	"	"	確認できず	
37	小田浦古墳群・窯跡群	1985・86 (S.60,61)	円墳3基 (横穴式石室)、須恵器窯跡2基 (古)	『牛頸後田・小田浦古墳群』所収
38	小 田 浦 窯 跡 群		須恵器窯跡2基、1976 (S. 51) 立正大学調査 (古)	
39	"		須恵器窯跡2基、1976 (S. 51) 立正大学調査 (古～奈)	
40	"	1986 (S. 61)	須恵器窯跡2基、1基は未操業 (古)	"
41	小 田 浦 窯 跡 群	1986 (S. 61)	試掘調査で確認できず	

No	遺 跡 名	調 査 年 度	遺 跡 の 内 容	備 考
42	後 田 古 墳 群	1982 (S. 57)		『牛頸後田・小田浦古墳群』所収
43	"	1986 (S. 61)	円墳10基（横穴式石室7、小石室3） (古)	"
44	"	"		"
45	後 田 窯 跡 群	1986 (S. 61)	須恵器窯跡2基 (古～奈)	『牛頸後田窯跡群』所収
46	"	1986 (S. 61)	" 1基（灰原のみ） (古)	"
47		1985 (S. 60)		
48		"	試掘調査で確認できず、窯体と見えたのは炭焼窯らしきもの	
49		"		
50	小 田 浦 窯 跡 群	1984 (S. 59)	須恵器窯跡2基 (古)	『牛頸小田浦窯跡群』所収
51	"	1984 (S. 59)	窯体流失か	
52		1986 (S. 61)	試掘調査で確認できず	
53	後 田 古 墳 群	"	円墳1基（横穴式石室）	『牛頸後田・小田浦古墳群』所収
54		"	試掘調査で確認できず	
55		"	"	
56		"	"	
57	小 田 浦 窯 跡 群	"	須恵器窯跡1基（ほとんど流出） (奈)	『牛頸小田浦窯跡群』所収
58		"	試掘調査で確認できず	
59	後 田 窯 跡 群	"	須恵器窯跡3基 (奈)	『牛頸後田窯跡群』所収
60	"	"	" 1基 (古)	"
61	"	1987 (S. 62)	" 5基 (古～奈)	"
62		1986 (S. 61)	試掘調査で確認できず	
63	後 田 窯 跡 群	"	須恵器窯跡2基 (古～奈)	"
64		"	試掘調査で確認できず	
65	後 田 窯 跡 群	1987 (S. 62)	須恵器窯跡1基 (古)	"
66	"	"	" (奈)	"
67		1986 (S. 61)	試掘調査で確認できず	

(S) : 昭和、(H) : 平成

(縄) : 縄文時代、(弥) : 弥生時代、(古) : 古墳時代、(奈) : 奈良時代

(平) : 平安時代、(鎌) : 鎌倉時代

Ⅱ．位置と環境

胴ノ元古墳は大野城市牛頸二丁目8番に所在する。九州最大規模の須恵器窯跡群である牛頸窯跡群のほぼ中央にあたり、直線距離にして博多湾から約12.5km、大宰府政庁跡から約4.5kmの場所である。福岡平野は南西部を脊振山塊に、東部を月隈丘陵に限られており、その中央を御笠川と那珂川が北流している。御笠川の支流の一つに牛頸川がある。その上流の、脊振山塊より派生する低い丘陵の連なっている一帯が牛頸窯跡群であり、大野城市大字牛頸・上大利を中心として北は春日市、東は大宰府市の一部を含む東西約4km、南北約4.6kmの範囲を持つ。窯跡の総数は300以上とも言われており、これまでに200基以上の発掘調査が行われた。これらの窯の操業期間は6世紀半ばから8世紀後半にかけてであったと考えられている。このように須恵器窯跡の発掘調査が先行した牛頸地域であるが、近年の大規模開発に伴って古墳および集落跡の調査例が増加してきた。

当地域の古墳はそのほとんどが6世紀後半から7世紀後半にかけて築造されたものであり、胴ノ元古墳もこの範囲に含まれる。現在のところ、この地域で最も古い古墳は春日市で発見されている。向谷1号墳（第2図・10、第3図）である。この古墳は方墳で、他の円墳2基とともに牛頸窯跡群のほぼ北端部に古墳群を形成していた。^(註1)春日市教育委員会による発掘調査の結果、1号墳には4世紀末～5世紀初め、残りの円墳2基（2・3号墳）については6世紀半ばという築造時期が与えられている。向谷1号墳と2・3号墳の間にはこのように1世紀以上のへだたりがあるが、これを埋めるものとして春日市平田北1・2号墳（第2図・10、第3図）^(註2)と本市塚原古墳群（第2図・50、第3図）があげられる。平田北1・2号墳は向谷古墳群の南約250mのところに位置しており、ともに河原石小口積みの竪穴式石室を持っていた。その構造等からいずれも向谷1号墳に後続するものと考えられる。塚原古墳群は牛頸川西岸の水田の下から見つかった。耕作によってその上部をほとんど削平されていたが、そのいくつかは石室床面付近が残っており、土器、鉄器、装身具などが出土した。出土須恵器が陶器Ⅰ型式4段階のものからあること、竪穴系横口式石室の特徴を持つ石室があることなどから5世紀後半～6世紀初めに築造されたものと考えられる。なお、最終的にこの古墳群では円墳26基と小石室10基が確認された。

後期になると、比較的規模の小さな群集墳が各地に散在するようになる。その中では総数19基からなる中通古墳群（第2図・31、第3図）^(註3)と、11基からなる後田古墳群（第2図・60、第3図）^(註4)が大きなものである。いずれも、最大規模の盟主墳が他と同じ円墳でありながらかなり離れた場所に1基だけ造営される、という特色を持っている。他には、胴ノ元古墳の南西約1kmに円墳3基からなる小田浦古墳群（第2図・63、第3図）^(註5)、石室の一部が残っていた月の浦

古墳（第2図・64、第3図）、石室の残骸が残るばかりであった日ノ浦古墳（第2図・47、第3図）^(註6)などが区画整理区域内の古墳である。また、向谷古墳群、平田北1・2号墳同様行政的には春日市に属するものの牛頸黒跡群内に含まれる古墳としては、本市のものと同名であるが塚原古墳群（第2図・46）、大堤古墳群（第2図・55）、イケ谷古墳群（第2図・56）、西浦古墳群（第2図・6）などが知られている。まず塚原古墳群は、本市の塚原古墳群の北方約0.5kmのところにあり、円墳4基からなる。4基のうち1基は前方後円墳の可能性があるとされている。この塚原古墳群から西へ約1.4kmに円墳3基以上からなるイケ谷古墳群、その北方約0.6kmのところに円墳3基からなる大堤古墳群があり、イケ谷古墳群の西方約0.3kmのところに円墳4基からなる西浦古墳群がある。西浦古墳群は春日市と那珂川町の境界付近の観音山（標高約150m）の東麓に位置するが、観音山の北・西麓には総数260基以上にも及ぶ観音山古墳群（第2図・5）^(註7)がある。この観音山古墳群より西側は那珂川町であり牛頸黒跡群の範囲からはずれるが、こちらでは古式の前方後円墳、前方後方墳から後期の群集墳まで多数の古墳の所在が知られている。

集落については、主に6世紀半ば以降に営まれたことがわかっている。惣利遺跡（第2図・9）、塚原遺跡（第2図・50）、日ノ浦遺跡（第2図・47）などがこの時期に当たる。いずれも須恵器の生産と密接にかかわっていた集落であると考えられている。しかし、最近では須恵器生産以前の様子が少しずつ判明してきた。円入遺跡（第2図・41）^(註8)は5世紀後半から6世紀初頭にかけて営まれた集落で、前述の塚原古墳群と同時期のものと考えられる。また、惣利遺跡^(註9)では弥生時代前期から中期初頭の住居跡、貯蔵穴などが発見されており、日ノ浦Ⅱ遺跡（第1図・22）では小壺を副葬した弥生時代前期の土坑墓が見つかった。さらに塚原遺跡と日ノ浦遺跡からは縄文時代晩期の堅穴住居跡が検出され、当地には6世紀半ば以降に破壊された集落が存在した可能性も出てきた。

（註1）『春日地区遺跡群Ⅴ』春日市教育委員会 1987

（註2）春日市教育委員会技師、丸山康晴・平田定幸氏の御教示による。

（註3）『牛頸中通遺跡群』大野城市教育委員会 1980 『牛頸中通遺跡群Ⅱ』大野城市教育委員会 1982

（註4）『牛頸後田・小田浦古墳群』大野城市教育委員会 1992

（註5）註4に同じ。

（註6）註3の後者の報告書に写真のみ掲載。

（註7）『観音山古墳群』那珂川町教育委員会 1982 『観音山古墳群Ⅱ』那珂川町教育委員会 1986

（註8）『春日地区遺跡群Ⅳ』春日市教育委員会 1986

（註9）『春日地区遺跡群Ⅱ』春日市教育委員会 1983

表2 牛頸周辺遺跡地名表

1	天神山古墳群	春日市大字上白水	前方後円墳、円墳	
2	天神山水城	〃 〃	土塁	（国指定史跡）
3	大土居水城跡	〃 〃	土塁	（国指定史跡）
4	ウトグチ黒跡群	〃 〃	黒跡2基以上	1987春日市教委調査（2基）

5	観音山古墳群	那珂川町大字中原他	前方後円墳・円墳 260基以上	1972県教委、那珂川町教委調査
6	西浦古墳群	春日市大字上白水	円墳 4 基	1981春日市教委調査
7	大牟田池窯跡	" 大字春日	窯跡 1 基以上	
8	惣利窯跡群	" "	窯跡15基以上	1977～80春日市教委調査（9基）
9	惣利遺跡群	" "	古墳～歴史時代住居跡	1979・80春日市教委調査 縄文期中世
10	向谷遺跡群	春日市大字春日	甕棺・方墳、弥生～歴史時代住居跡	1979～82春日市教委調査
11	春日平田窯跡群	" "	窯跡21基	1982～85春日市教委調査（21基）
12	九州大学 筑紫キャンパス内遺跡	春日市・大野城市	集落、溝等、縄文～奈良	1978～九州大学調査
13	梅頭窯跡	大野城市大字上大利	窯跡 1 基	消滅
14	上園遺跡	" "	住居跡、井戸、弥生～歴史時代	1985～大野城市教委調査
15	出口窯跡	" "	窯跡 1 基	
16	唐土遺跡	" 下大利	奈良時代の土器溜め	1989大野城市教委調査
17	吉松古墳	太宰府市大字吉松	円墳 1 基	
18	水城	太宰府市・大野城市	土塁	（国指定特別史跡）
19	神ノ前窯跡群	太宰府市大字吉松	窯跡 2 基	1978太宰府市教委調査（2基）
20	篠振窯跡	" "	窯跡 2 基	1974・85太宰府市教委調査（2基）
21	尊田窯跡	" "	窯跡	
22	長浦窯跡	" 大字向佐野	窯跡 1 基	1972福岡県教委調査（1基）
23	向佐野窯跡群	" "	窯跡 3 基	同上（3基）
24	宮ノ本窯跡群	" "	窯跡 8 基	1979・84太宰府市教委調査（8基）
25	谷蟹窯跡	大野城市大字上大利	窯跡 1 基	消滅
26	野添窯跡群	" "	窯跡10基以上	1969福岡県教委調査（2基）1986大野城市教委調査（3基）
27	大浦窯跡群	" 大字牛頭	窯跡 5 基	1968福岡県教委調査（2基）
28	平田窯跡群	" "	窯跡 9 基	1972立正大学調査（4基）1979～81大野城市教委調査（4基）
29	東浦窯跡群	" "	窯跡 3 基	1968国士館大学調査（3基）
30	上平田窯跡群	" "	窯跡 4 基	1972福岡県教委調査（4基）
31	中通窯跡群	" "	窯跡12基以上	1979・80県教委・大野城市教委調査（6基）
32	中通古墳群	" "	円墳19基	1972・73福岡チブサン会調査（13基） 1975県教委調査（1基） 1979・80県教委・大野城市教委調査（5基）
33	原窯跡群	" "	窯跡 3 基	土取りで灰原の一部を残すのみ
34	ハセムシ窯跡	" "	窯跡30基以上	1987・88大谷女子大学・大野城市教委調査（15基）
35	井手窯跡群	" "	窯跡39基以上	1982～86県教委調査（31基）1988大野城市教委調査（3基）
36	道ノ下窯跡群	" "	窯跡10基以上	1982～86県教委調査（10基）

37	足洗川窯跡群	" "	窯跡5基以上	1982～86県教委調査（4基）
38	笹原窯跡群	" "	窯跡4基以上	同上（4基）
39	長者ヶ原窯跡群	" "	窯跡16基	同上（16基）
40	野口窯跡群	太宰府市大字大佐野	窯跡2基以上	
41	円入遺跡	春日市大字春日	古墳時代住居跡	1981春日市教委調査
42	徳利古墳	" "	円墳1基	消滅（横穴式石室・須恵器出土）
43	春日平田遺跡群	" "	弥生～歴史時代住居跡、古墳	
44	華無尾窯跡群	大野城市大字牛頸	窯跡2基	消滅
45	華無尾遺跡	" "	散布地	旧石器～縄文（ナイフ形石器石鏃等出土）
46	塚原古墳群	春日市大字春日	円墳4基	前方後円墳1基・円墳2基か？
47	日ノ浦遺跡	大野城市大字牛頸	縄文～奈良時代住居跡	1987～90大野城市教委調査
48	畑ヶ坂窯跡群	" "	窯跡3基	1基消滅
49	畑ヶ坂古墳	" "	円墳1基	
50	塚原遺跡群	" "	円墳24基以上 古墳時代・奈良時代住居跡	1987～1993大野城市教委調査
51	胴ノ元古墳	" "	円墳1基	1991大野城市教委調査
52	胴ノ元窯跡群	" "	窯跡2基	
53	城ノ山窯跡	" "	窯跡1基以上	窯本体が空洞で露出している
54	楠木遺跡	春日市大字下白水	甕棺墓	弥生（中期）
55	大堤古墳群	" 大字上白水	円墳3基	（満水時水没）
56	イケ谷古墳群	" "	円墳3基以上	（春日原ゴルフ場内）
57	浦ノ原窯跡群	" 大字下白水	窯跡10基以上	1978春日市教委調査（8基）
58	浦ノ原遺跡	" "	散布地	土師器・須恵器
59	後田窯跡群	大野城市大字牛頸	窯跡16基以上	1986大野城市教委調査（16基）
60	後田古墳群	" "	円墳11基	1982・86大野城市教委調査
61	小田浦窯跡群	" "	窯跡13基以上	1976立正大学調査（4基）1982～86大野城市教委調査（9基）
62	小田浦古墳群	" "	円墳3基	1976立正大学調査（1基）1987大野城市教委調査（2基）
63	月ノ浦窯跡群	" "	窯跡2基	1982大野城市教委調査（1基）
64	月ノ浦古墳	" "	円墳1基	消滅（横穴式石室）
65	大谷窯跡群	" "	窯跡12基以上	1971国士館大学調査（4基）
66	石坂窯跡群	" "	窯跡20基以上	1983・89・90大野城市教委調査（7基）
67	足洗川遺跡	" "	散布地	旧石器（石刃出土）
68	上大利水城	" 上大利	土塁	（国指定特別史跡）
69	出口遺跡	" 下大利	弥生～奈良の集落跡	1989大野城市教委調査『出口遺跡』

Ⅲ．調査の結果

(1) 立地と現況

牛頸川流域においては、脊振山塊より東方へ派生する大小さまざまな丘陵と谷が複雑な地形を形成している。胴ノ元古墳はそのひとつの丘陵の北東端部に位置する。標高は約61mであり、この独立丘陵端部をとり巻くように存在する水田面との比較差は約14mを測った。古墳の南西側の丘陵上には福岡地区水道企業団牛頸浄水場がある。発掘調査開始前、当地は山林であったが周溝と思われる地面のくぼみを確認できた。石室はすでに開口しており、内部に人が出入りした痕跡が明らかであった。天井石は上部が露出しており、その上に腐葉土が堆積していた。これを観察することによって長さ約4m、幅約1.5mという規模の石室を持つものと予想された。石室の北側と西側がほぼ平坦な尾根上にあるのに対して、南側と東側はかなり急な斜面となっており、この斜面を利用して築造されていると思われた。

(2) 墳丘

天井石以上の部分の盛土が流失しているため、本来の墳丘の高さは不明である。盛土に先立って地山整形がおこなわれている。土層観察の結果では、北側と西側では平坦面を造った後に幅約1.6m、深さ約0.3～0.5mの周溝を造り出していたが、東側では周溝の痕跡は見られなかった。

石室を構築するために墓坑を掘っているが、北側では2段掘りをしているようである。墓坑内に大きな腰石を据え、厚さ10～50cmくらいの粘土あるいは砂混じりの土を4～6段に積んで固定している。ここに使われている土は全体にしっかりしたものであるがそれほど緻密に固められたものではない。細かく見ると、東側の積み方が最も丁寧であり、次いで西側、北側という順位をつけることができる。このようにして基礎を固めた後は、墳丘を整えるための盛土を行なう。胴ノ元古墳の場合、石室北側では石を積むに従ってその後方を固めて、それから墳丘全体を盛り上げていく方法をとっている。石室西側では、積んだ石の後方の固め方が北側に比べるとやや無造作である。さらに東側では20cmほど1段目の盛土をした後に、厚さ約1.1mの盛土を一気におこなっている。このように、基礎となる部分を密に固めた場所ほどその上位の盛土が粗いという状況が認められる。

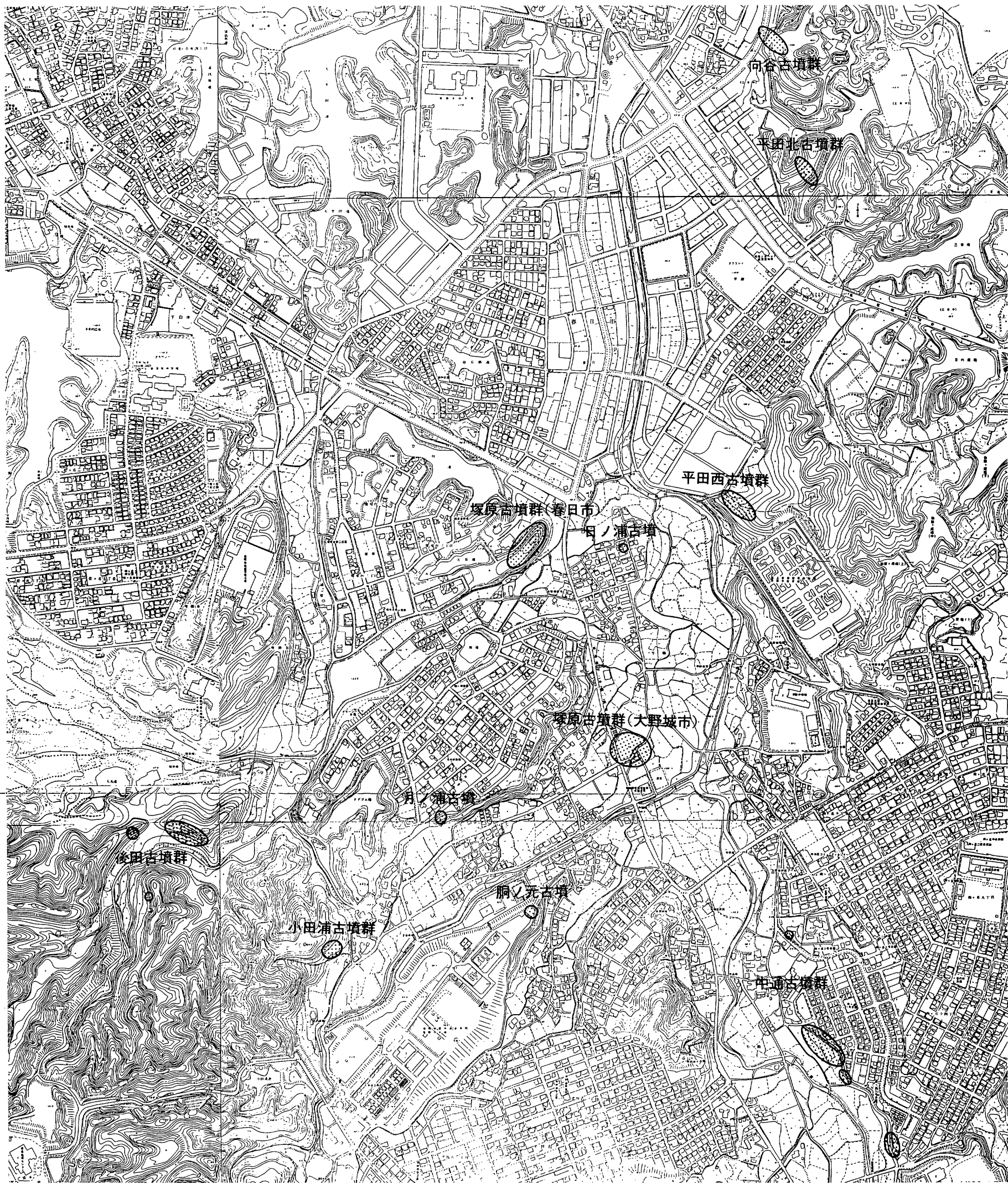
墳丘の規模であるが、途中で切れている周溝に従ってあくまでも墳丘の裾だけを追うと第4図のような範囲となり、ややゆがんだ楕円形とでも言うべきプランとなる。玄室主軸方向で約11m、これと直交して玄室中心を通る方向で約10m、最大径約14.5mという大きさである。



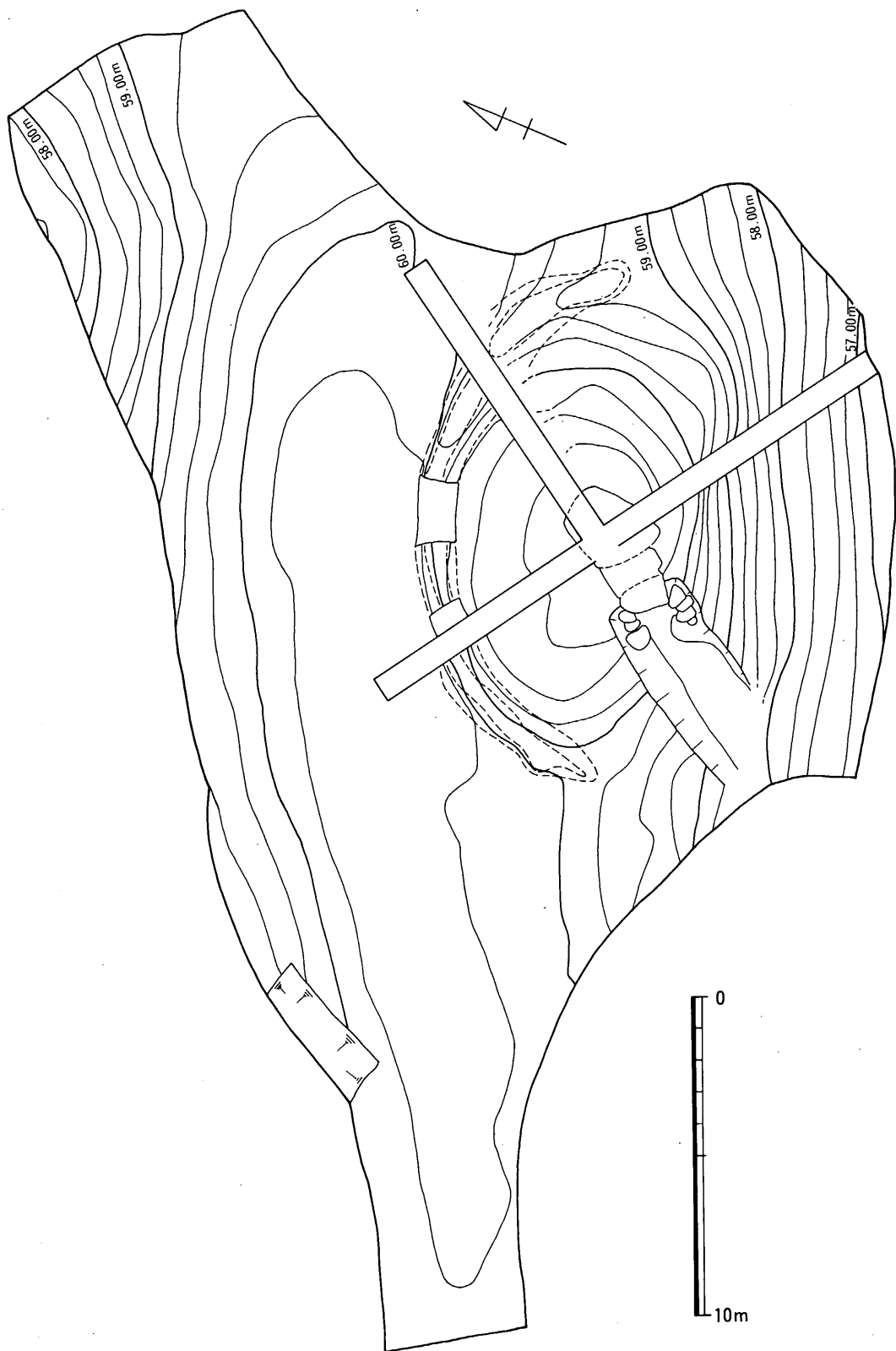
第1図 牛頭土地区画整理事業地内遺跡分布図 (1/1万)



第2図 牛頸周辺遺跡分布図(1/2.5万)



第3図 位置図 (1/1万)



第4図 洞ノ元古墳地形実測図 (1/200)

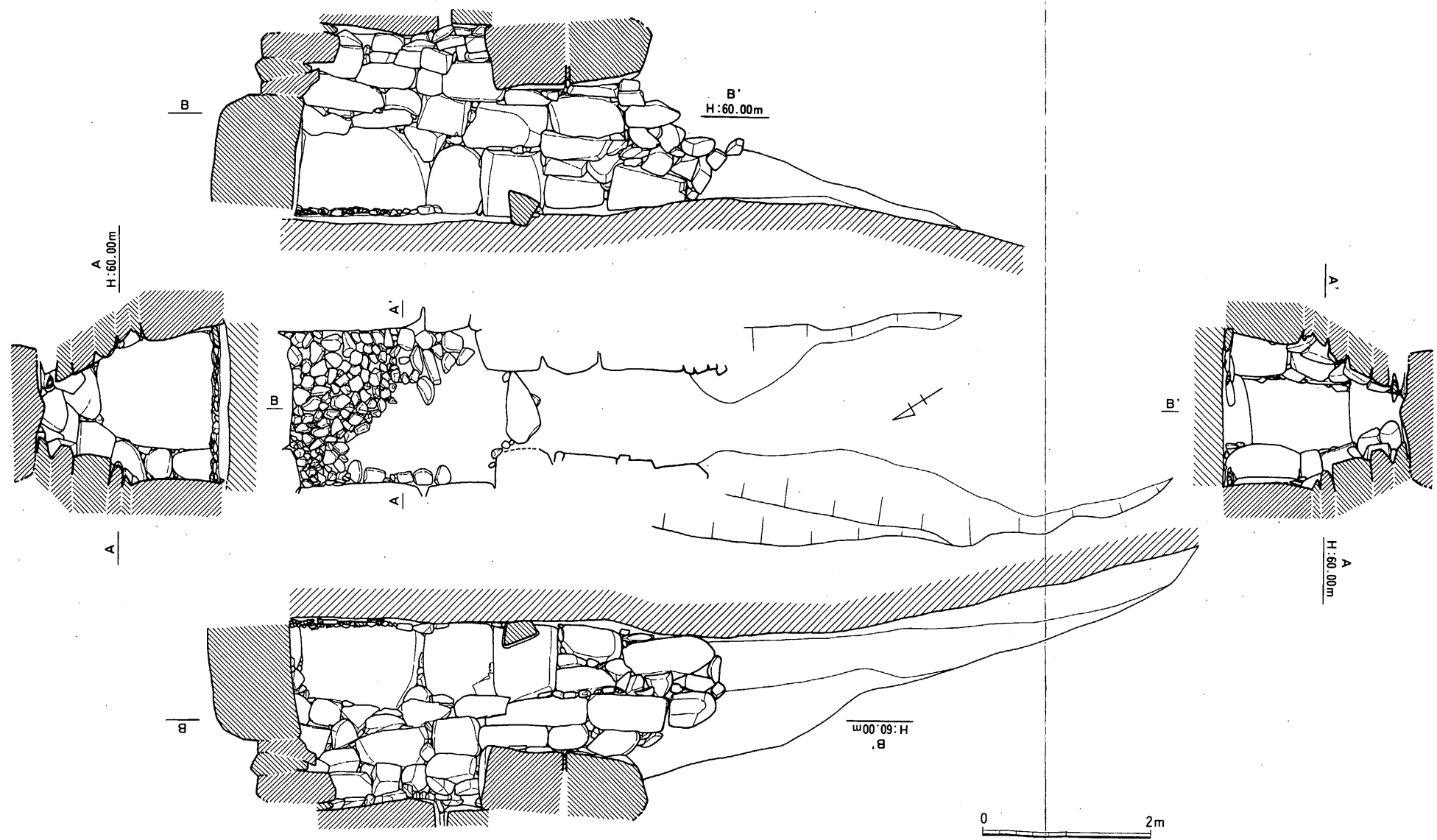
(3) 石 室

本古墳の石室はおおよそ南西に開口する単室の横穴式石室である。玄室・羨道ともに主軸は変わらずN-35°-Eである。玄室プランは南北方向に長いほぼ正確な長方形である。右側壁長約2.35m、左側壁長約2.3m、幅は奥壁側で約1.85m、玄門側で1.8mである。床面はほぼ半分について敷石が残っている。玄室中央より奥壁側では20~30cm四方ほどの石が隙間なく敷き詰められているが、中央よりも玄門側では残りも悪く40cm四方ほどの石が無造作に置かれている。敷石が残っている部分では、床面から天井までは約2.1mの高さである。奥壁は大きさ・高さともに極端に違う2石を腰石として使っている。右側の大石が幅約1.35m、床面からの高さ約1.4mであるのに対して、左側の石はそれぞれ約0.6m、約0.7mである。このため、奥壁の左側においては2段目以上にやや大ぶりの石を小石で調整しながら横置きにしており、床面からの高さが約1.8mを測る5段目で、右側と高さをほぼそろえている。ここからさらにもう1段石を積み、その上に天井石を置いている。側壁は左右いずれも腰石として2石を使っている。右側壁の場合奥壁側に大ぶりの石を横にして置き、玄門側にはそれよりもやや小ぶりの石を縦に置いている。床面から両者の上端部までの高さの差が約20cmあるため、奥壁側では薄めの石、玄門側では厚めの石を2・3段目として使い、3段の上端面ではほぼ高さをそろえている。その上に4・5段目を小ぶりの石を使って積み上げ、さらに小石で調整しつつ天井石を置いている。左側壁でも奥壁側により大きな腰石が据えられているが、玄門側の腰石との大きさの差は右側壁ほどではなく上端部の高さも両者ほぼ同じである。その上にやや小ぶりの石で2段目、それよりも大ぶりの石で3段目、ふたたび小ぶりの石で4段目と順に積み、さらに小石で調整して天井石を乗せている。袖石は左右とも約50cm内側にせり出させており、右側で約80cm、左側で約90cmの高さを測る。いずれの袖石も上に2段ずつ積んだ後に、大きな楣石を乗せている。楣石としては横長の石を1石横に置き、袖石とのわずかな隙間を小石で調整している。玄門幅約0.92m、高さ約1.2mを測る。

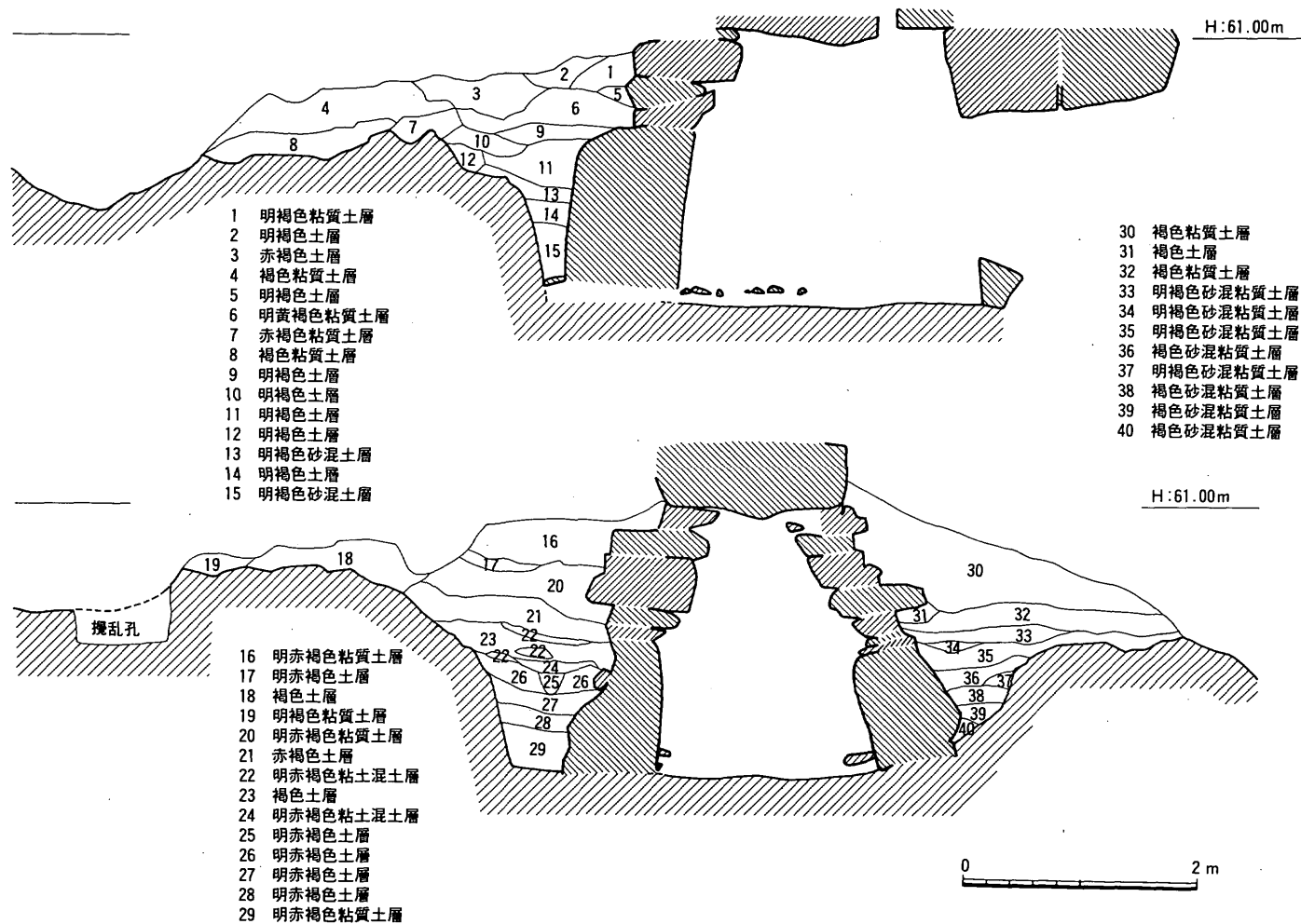
羨道は袖石内側ラインに合わせる形で直線的に築かれている。袖石の外側から、右側で約1.2m、左側で約1.3m程度と考えられる。側壁は左右いずれも大ぶりの石を横に4段積み上げ、さらに天井石を乗せている。

墓道は最初石組み墓道となり、さらに素掘りの部分へと続く。石組の部分は短く「ハ」の字型に開いている。素掘り部分は直線的に南西方向に延び、途中で削りとられている。残存距離は、約5.3mである。

閉塞は全くのこっていないかった。



第5図 洞ノ元古墳石室実測図 (1/60)

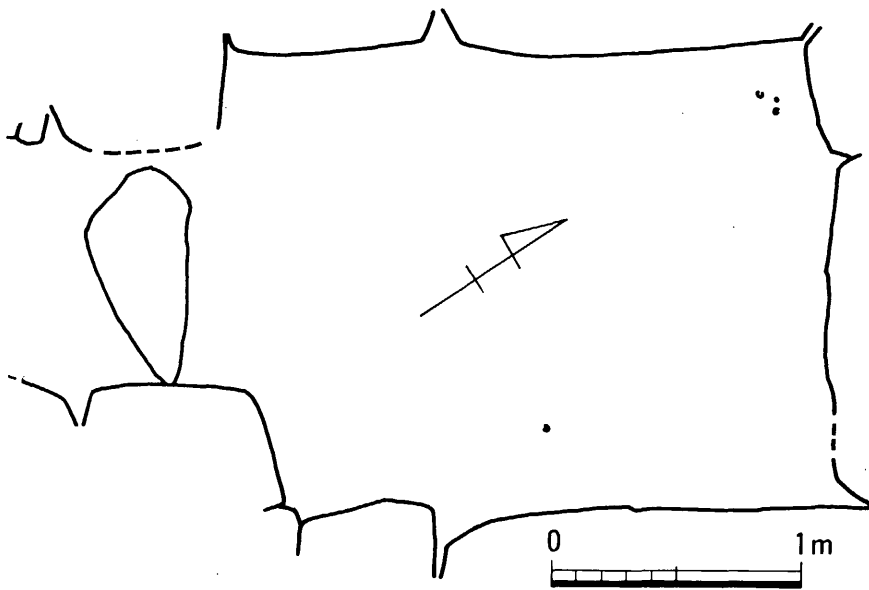


第6図 胴ノ元古墳墳丘断面実測図 (1/60)

(4) 出土遺物

出土遺物は列挙すれば以下のとおりである。

装身具	耳環	4
	ガラス小玉	1
鉄器	しおで 鞍	1
	杯蓋	4 (図示 3)
須恵器	杯身	4 (図示 3)
	杯	1
	高杯	2 (図示 1)
	横瓶	1
土師器	甕	2
	椀	2

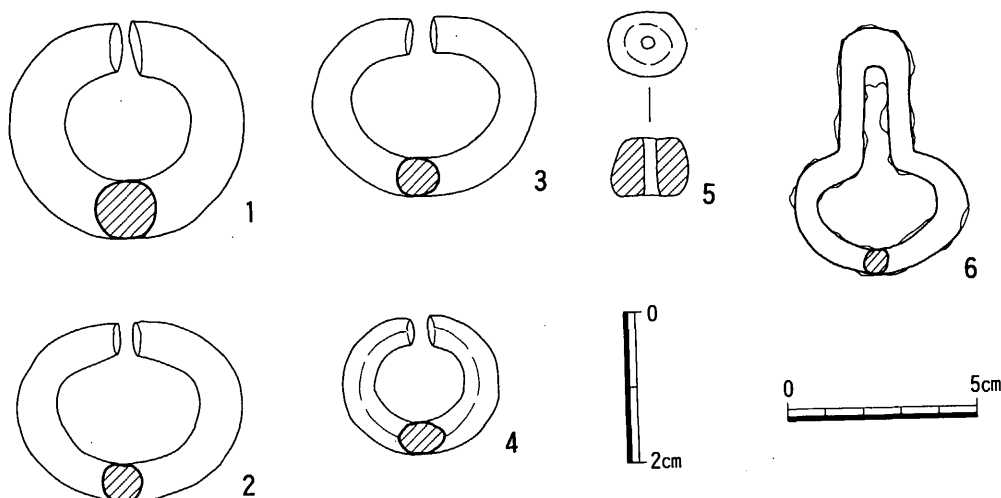


第7図 胴ノ元古墳遺物出土状態実測図 (1/30)

出土状態 (第7図)

装身具類のうち、ガラス小玉と耳環3点(第8図1・2・3)は玄室床面からの出土で、原位置に近い可能性がある。残りの耳環は墓道埋土中、鉄器は玄室埋土中の出土。須恵器は、玄室埋土中からの出土が第9図1・4・5、墓道埋土中からの出土が3・6・7・11、周溝埋土

中からの出土が2と第10図13、墳丘出土が第9図9・10である。土師器は12が玄室埋土中、8が墓道埋土中からの出土である。



第8図 胴ノ元古墳出土装身具・鉄器実測図（1～5は1/1・6は1/2）

遺物

装身具（第8図、図版8）

耳環（1～4） いずれも青銅に鍍金したものであるが金はほとんど剥落しており、表面が風化している。1は径3.2×2.9cm、断面0.8×0.75cmを測り、重さは25.5gである。2は径2.95×2.55cm、断面径0.5×0.55cm、重さ9.5g。3は径2.95×2.5cm、断面形0.55×0.55cm、重さ9.8g。4点のなかでは最も金の残存状態が良い。4は径2.05×1.9cm、断面形0.65×0.45cm、重さ6.8gを測る。

ガラス小玉（5） 紺色を呈し、径1.05×0.95cm、孔径0.2cm、厚さ0.8cmを測る。

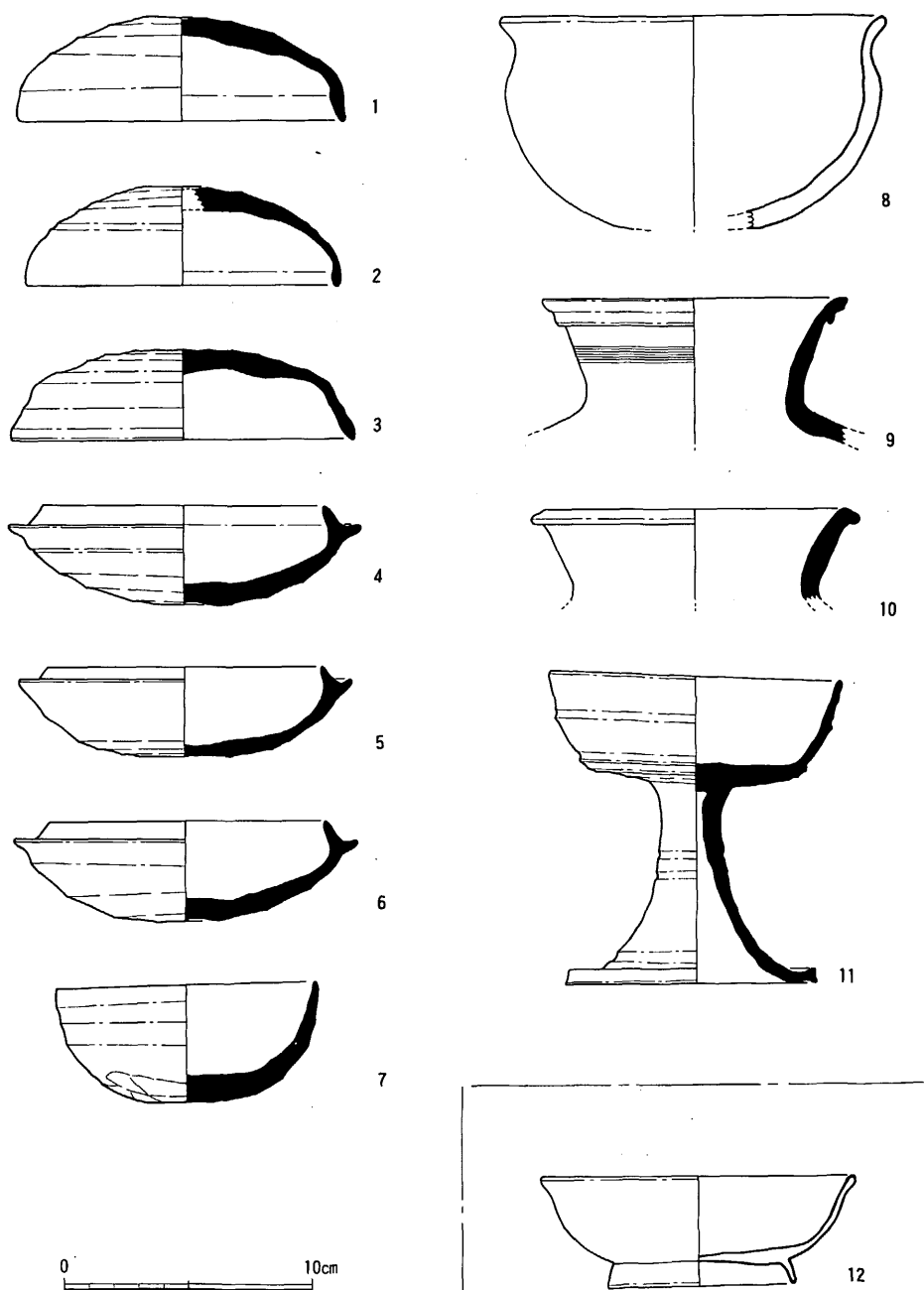
鉄器（第8図、図版8）

鞍（6） 馬具の鞍の一部と思われる。長さ6.6cm、最大幅4.7cm、重さ6.8gを測る。

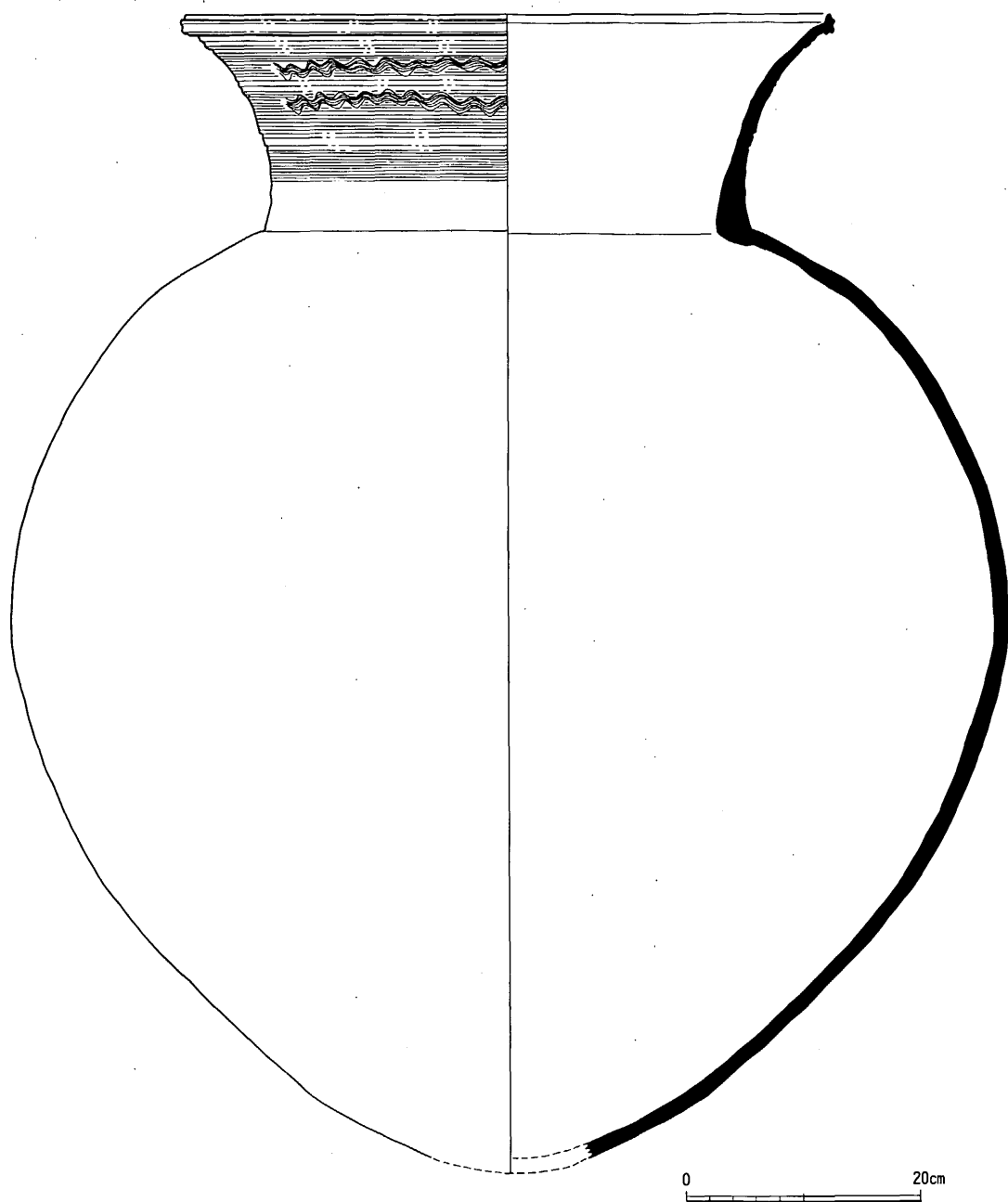
須恵器（第9・10図、図版7）

杯蓋（1～3） 1・2は丸味を持つ天井部がそのまま体部へとつづく。天井部をヘラケズリし、他の部分はヨコナデとナデ。口径は1が13.1cm、2が12.6cmである。3はやや直線的な体部を持つ。天井部をヘラケズリし、他をヨコナデとナデ。天井部外面に「|」形のヘラ記号を持つ。焼けひずみがはげしいが、復元口径で13.8cmを測る。

杯身（4～6） 低く内傾する立ち上がりを持ち、口径11.1～11.4cm、受部径13.4～14.1cmの大きさである。いずれも底部外面をヘラケズリし、他の部分にヨコナデとナデをおこなう。5は外面全体に灰をかぶっている。



第9図 胴ノ元古墳出土土器実測図① (1/3)



第10図 胴ノ元古墳出土土器実測図② (1/6)

高杯 (11) 口径11.8cm、器高12.6cm、脚端径10.1cmを測る無蓋高杯である。杯部の底部外面をヘラケズリし、他はヨコナデとナデ。杯部と脚部中位に2条、脚部下位に1条の沈線を持つ。脚部の中位以上にシボリ痕が残る。

碗 (7) 口径10.5cm、器高4.7cmを測り、ほぼ直線状に伸びる口縁部を持つ。底部外面に手持ちヘラケズリをおこなない、他にはヨコナデとナデをおこなう。底部から体部にかけての外面に「∩」形のヘラ記号を持つ。ほぼ完形だがやや焼けひずみが見られる。

甕 (10・13) 10は口頸部の2分の1強の破片で、復元口径12cmの小型のものである。内外面ともにヨコナデをおこなう。わずかに残る胴部内面に同心円状の当て具痕が見られる。13は口径56cm、胴部最大径85.6cm、器高99.2cmを測る大型の甕である。口縁部には突帯があり、断面に多数の段が生じている。頸部は浅い沈線によって3段に区分けされ、上段と中段ではカキ目を施した後波状文をつけている。下段は上位にカキ目を施し、下位はヨコナデをおこなう。最大径を中位に持ちなだらかな曲線を描く胴部は、外面を平行叩きし、内面には同心円状の当て具痕が残る。胴部と頸部の接合は、胴部上端部に頸部を直接乗せ上げるような方法でなされている。全体に焼けひずみが激しい。

土師器

杯 (8・12) 8は全体の3分の2ほどが残る。復元口径15.4cm、器高8.5cmを測る。丸底で、口縁部は短く外反する。口縁部から胴部中位にかけての内外面をヨコナデし、胴部下位から底部にかけては内面をナデ、外面をヘラ状の道具でナデる。底部外面に黒斑が見られる。12も全体の3分の2ほどが残る。復元口径12.6cm、器高4.5cm、高台径7.6cm、高台高1cmを測る。底部外面をヘラ切り後ヨコナデし、その他にヨコナデとナデをおこなう。この12については他と比較して時期的に降ることが明確であり、混入したものと思われる。

Ⅳ．ま と め

(1) 調査の結果について

胴ノ元古墳の調査の結果について、簡単にまとめると、以下の通りである。

- ①標高約61m（水田面との比高差約14m）の独立丘陵の端部に位置する。
- ②直径約10～14.5m（周溝の内側で）の、不整形の円墳である。
- ③主体部は、南西方向に開口する単室の横穴式石室である。玄室の規模は、長さ約2.3m、幅約1.8m、高さ約2.1mである。
- ④玄室はすでに盗掘を受けていた。内部からガラス小玉1点、耳環3点、鉄製馬具1点、須恵器杯蓋1点、杯身2点が出土した。これらのうち、ガラス小玉と耳環については原位置に近い可能性がある。

(2) 造営時期と使用期間について

一般的に横穴式石室は盗掘を受けやすく、また、追葬が行われた場合、それ以前の埋葬跡が破壊されることがある。胴ノ元古墳は、調査前から開口しており盗掘を受けていることが明らかであった。このため、遺物のほとんどは原位置を保っておらず、いわば偶然性に左右されて出土したものと考えられる。しかし、時期決定にあたっては、出土遺物にほとんどを頼らざるを得ない。ここでは、このことを前提として胴ノ元古墳の造営時期と使用期間を考えていきたい。

まず、蓋杯について見ると、杯蓋3点（第9図・1～3）はいずれも身受けのかえりを持たず、天井部外面にヘラケズリを行う。杯身（4～6）も3点出土したが、いずれも立ち上がりは低く内傾し、底部外面にヘラケズリを行っている。第10図の甕は、頸部に波状文が施されている。従来用いられている小田富士雄氏の編年によれば、これらはⅢB～Ⅳ期（6世紀後半～末）にあたる。第9図、11の高杯も同時期として良いものである。ところが、第9図7の墓道埋土中出土の杯はⅤ期（7世紀前半）にあたる。これらのことから、胴ノ元古墳の造墓、使用期間は6世紀後半頃～7世紀前半頃と考えられる。

最後に、調査にご協力いただいた方々のお名前を記して、感謝の意を表したい。

梅尾ハツエ・河野房子・川辺美喜子・川辺満子・佐藤利恵子・篠原ウタ子・篠原純子・手塚キヨ子・中山チエ子・藤島ミトシ・藤田和子・吉嗣波津子。

圖 版



(1) 胴ノ元古墳調査前遠景（西から）



(2) 胴ノ元古墳調査前遠景（北から）



(1) 洞ノ元古墳調査前全景



(2) 洞ノ元古墳調査前近景



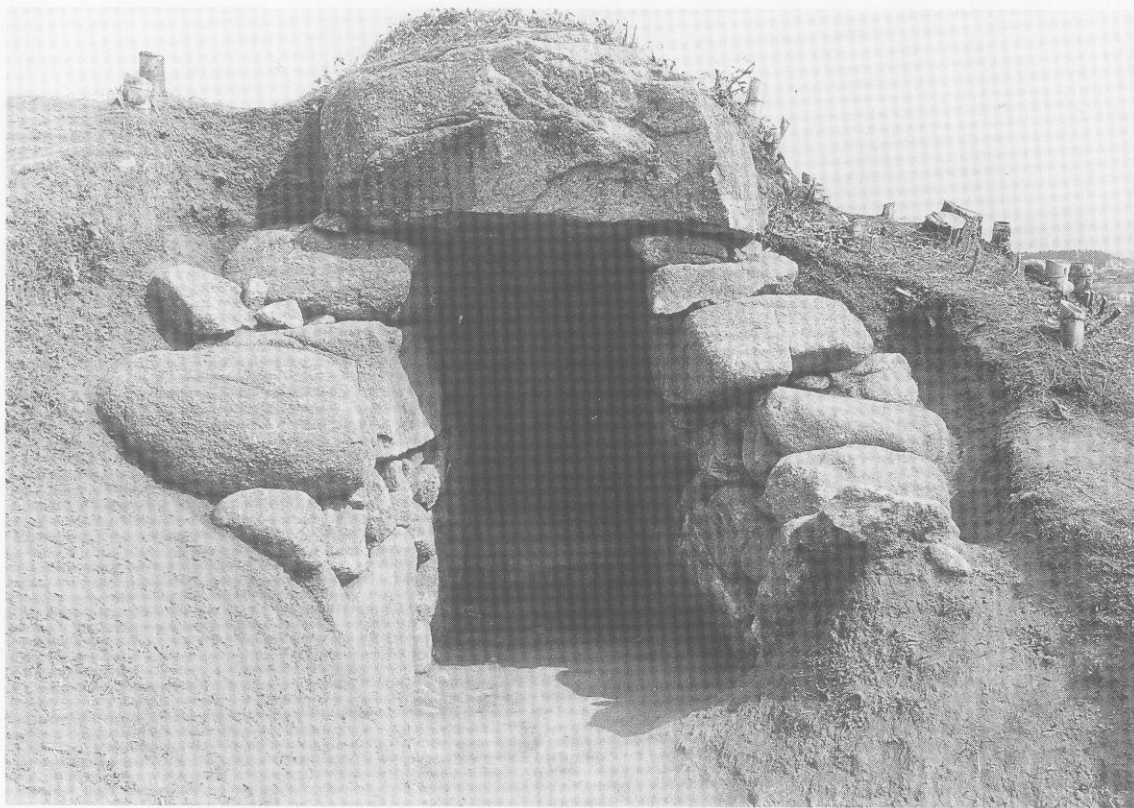
(1) 胴ノ元古墳調査後遠景（南東から）



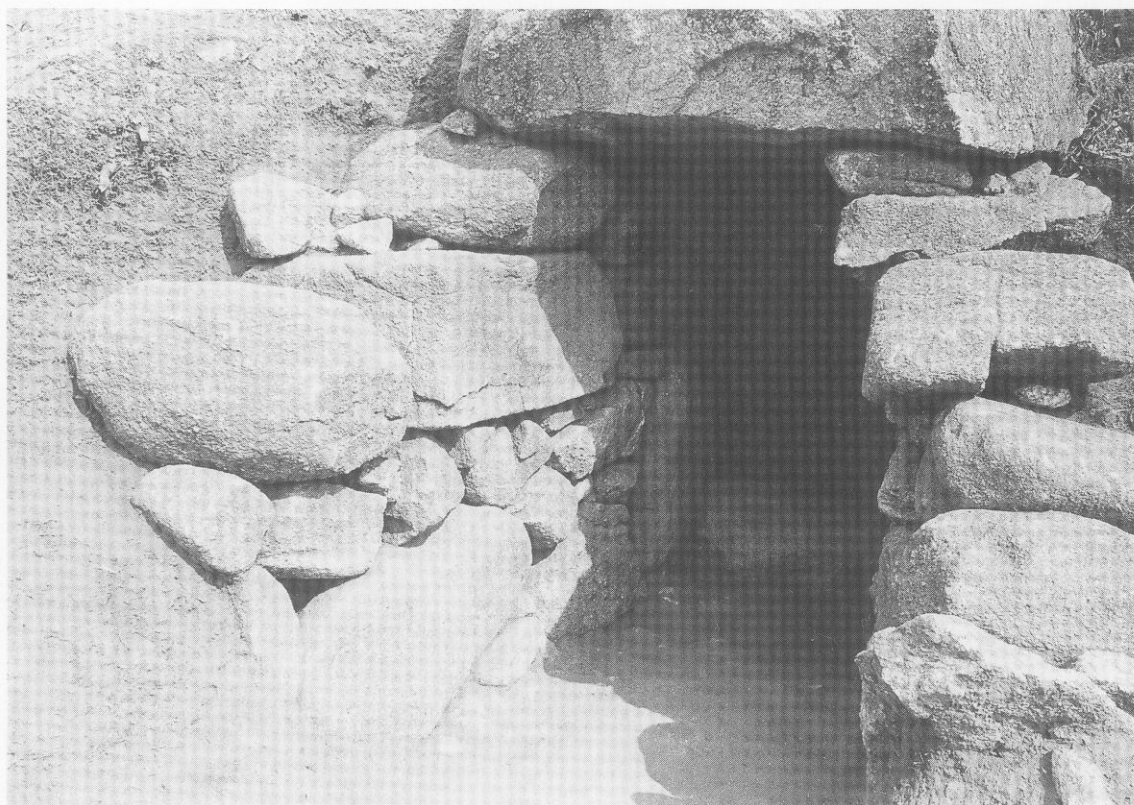
(2) 胴ノ元古墳調査後全景



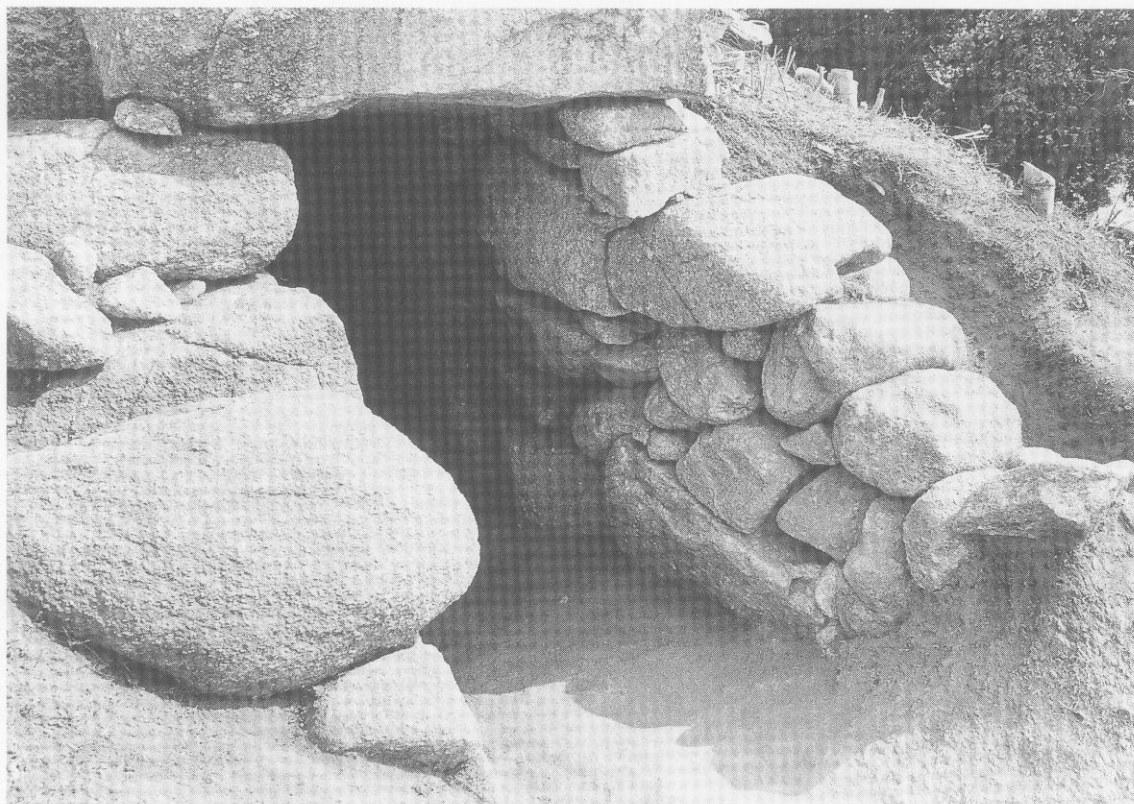
(1) 洞ノ元古墳調査後全景



(2) 洞ノ元古墳石室（正面から）



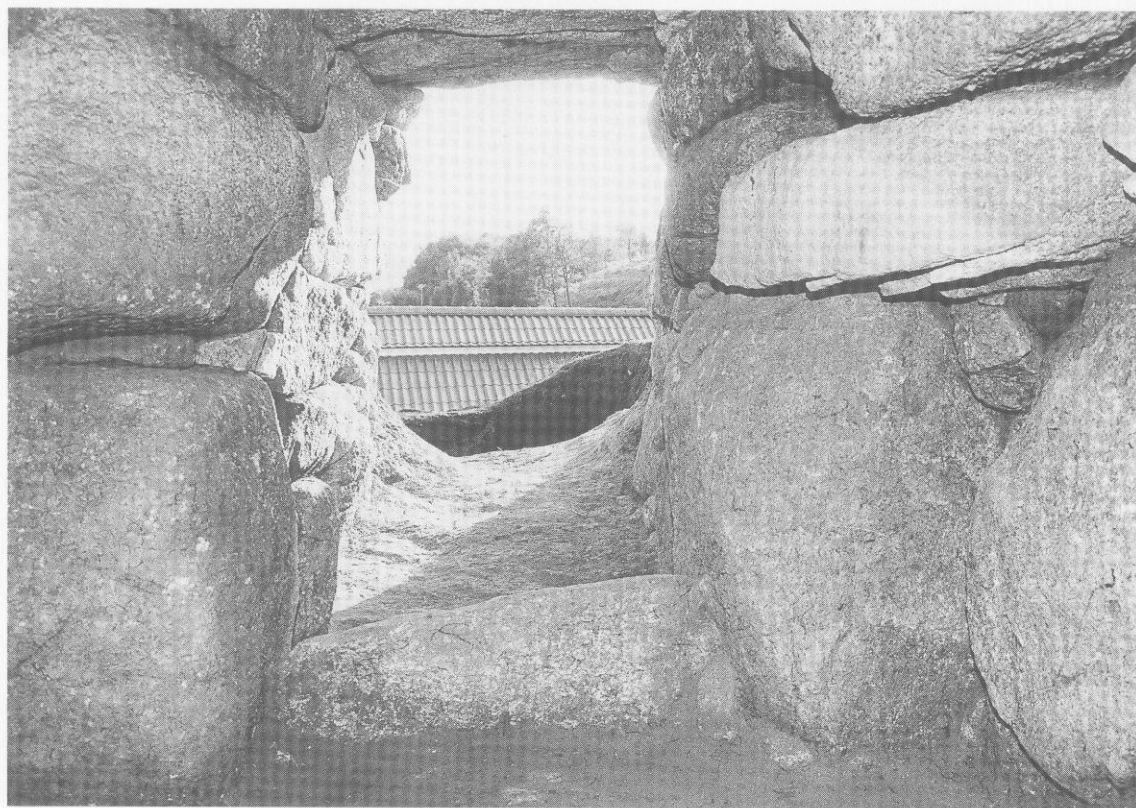
(1) 洞ノ元古墳石室（左袖）



(2) 洞ノ元古墳石室（右袖）



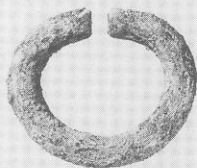
(1) 洞ノ元古墳石室（奥壁側を望む）



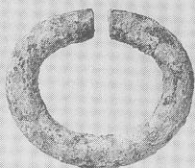
(2) 洞ノ元古墳石室（羨道側を望む）



1



3



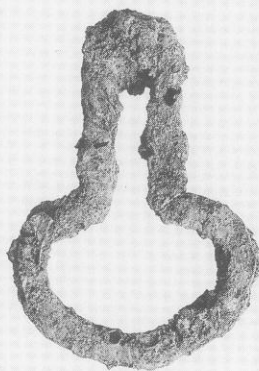
2



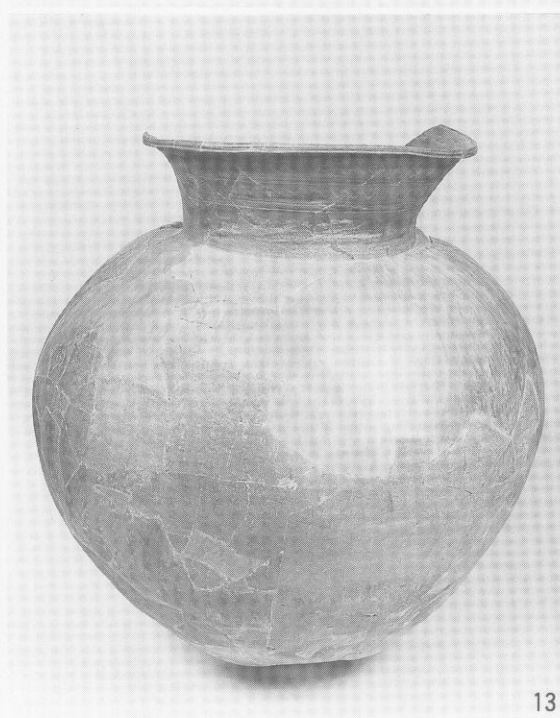
4



5



6



大野城市文化財調査報告書

第38集

平成5年3月31日

発 行 **大野城市教育委員会**
福岡県大野城市曙町二丁目2-1

印 刷 **陽明印刷企業組合**
福岡県春日市春日公園三丁目3-1